

Vistas

KOBE COLLEGE
NEWSLETTER

“Beauty Becomes a College”



22

2012・November

●Published by KOBE COLLEGE

神戸女学院大学

ジョブズの世界とリベラルアーツ

〈座談会〉

井口 耕二さん (翻訳家、神戸女学院大学文学研究科 非常勤講師)

松尾 公也さん (アイティメディア株式会社 スマートメディア事業推進部 チーフコネクター)

飯 謙 (神戸女学院大学 学長)

中村 昌弘 (神戸女学院大学 文学部英文学科 准教授、会議通訳者)

田辺 希久子 (神戸女学院大学 文学部英文学科 准教授、出版通訳者)

●神戸女学院大学大学院 文学研究科 英文学専攻
「通訳・翻訳コース」開設10周年記念プレイベント
・『ジョブズの世界を訳す』基調講演、シンポジウム

マルチメディアの進化と共に——7

情報通信技術整備の「架け橋」として——
人間科学部 環境・バイオサイエンス学科 出口 弘 教授

脳の活動から見えない事象を読み取る——11

脳科学研究者・理学博士 吉田 和子 さん

●文学部総合文化学科新カリキュラム

学びのテーマを探る楽しさを——13

文学部 総合文化学科 石川 康宏 教授

●音楽学科舞踊専攻学生による台湾公演

その一瞬に感動を刻む——15

音楽学部 音楽学科 舞踊専攻 島崎 徹 教授

音楽学部 音楽学科 舞踊専攻4年生 水野 さん

音楽学部 音楽学科 舞踊専攻3年生 岡 さん

●オーストリア・モーツァルテウム音楽大学との交流行事

国境を越え、音楽の楽しみ方を深める——16

音楽学部 音楽学科 佐々 由佳里 教授

ボランティア活動から見えてきた

これからの自分——17

文学部 総合文化学科4年生 松島 さん

文学部 英文学科2年生 出野 さん

●KCキャリア塾開講

“納得のいく就職活動”を支援する——18

キャリアセンター 樽本 裕見子 課長

松本 崇 さん

KCインフォメーション——19

●リベラルアーツ・カレッジで通訳・翻訳を学ぶ

ジョブズの世界と リベラルアーツ

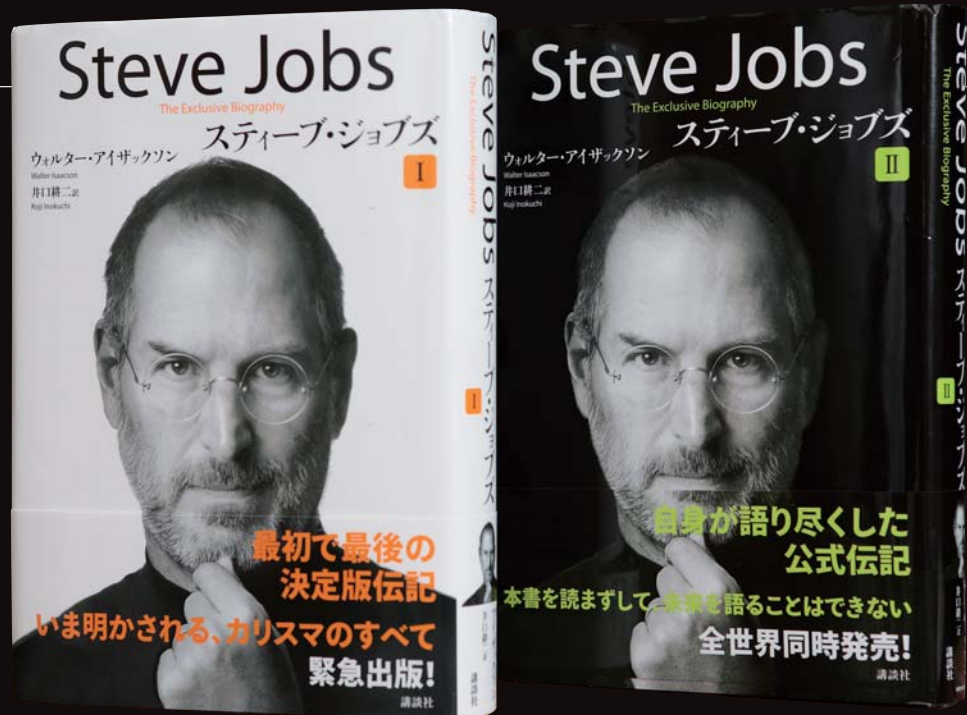
神戸女学院大学大学院の「通訳・翻訳コース」(文学研究科英文学専攻)が来年度、開設10周年を迎える。

それを記念するイベント「ジョブズの世界を訳す」が、7月15日に神戸女学院講堂で開催された。

世界同時発売のスティーブ・ジョブズの「公式伝記」の訳者、

井口耕二氏(神戸女学院大学大学院非常勤講師)による基調講演とシンポジウムが行われた(6ページに抄録掲載)。

イベント終了後、飯学長を交えて、リベラルアーツ・カレッジにおける通訳・翻訳教育をテーマに語り合った。



「スティーブ・ジョブズ I・II」
(ウォルター・アイザックソン 著
井口耕二 訳 / 講談社 2011)

ジョブズへのシンパシー

飯 井口先生が翻訳された『スティーブ・ジョブズ I・II』を拝読して、私はジョブズという人が好きになりました。彼は若いころから禅に傾倒し、インドを放浪したりしています。自ら解放されることを求め続けた求道者のような人生を感じました。ずいぶんエキセントリックな人だと言われていましたが、この本には彼に対する好意的な思い入れやシンパシーが感じられました。それは原文がすでにそうになっているからなのか、それとも井口先生が翻訳のプロセスで好意的な訳語を選ばれたからでしょうか。

井口 著者のウォルター・アイザックソンは、かなり中立な立場で書いていると思います。もちろん旧知の間柄で考えなどを著者に語るのですが、やっぱり何か信じきれないところがあったのではないかなという気がします。何か残しておきたいという強い気持ちがあつて、この本があるのかなど。そこに何か深いものを感じました。

中村 そうですね。自分の死について、スイッチ一つで消えてしまう瞬間にたとえて、アップルの製品にオン・オフのスイッチをつけたくないと思ったと述べています。

井口 スティーブ・ジョブズの有名な言葉に、「宇宙に衝撃を与える」というのがあります。その点は、アップルの製品群で一つの成果は出たわけですね。衝撃という意味ではありませんが、息子さんに対して何か残したいという思いがこの本になったのかなと思います。

妥協せず、完璧な製品を作る

飯 松尾さんはいち早くマックを使って音楽を作ったり、編集したり、製品を評価してこられました。ジョブズがクリエイティブな起業家として生きたのは、どのような時代だったのですか。

松尾 1970年代の半ば以降にマイクロチップの技術が進み、それを使って一旗揚げたいと思う若者たちが出てきました。ジョブズも、彼と一緒にアップルを立ち上げたスティーブ・ウォズニアクも、マイクロソフトのビル・ゲイツもそうです。

ただ、テクノロジーを発展させるだ



● 翻訳家、神戸女学院大学大学院文学研究科 非常勤講師

井口 耕二—— INOKUCHI Koji

● アイティメディア株式会社
スマートメディア事業推進部 チーフキュレーター

松尾 公也—— MATSUO Koya

● 神戸女学院大学 学長

飯 謙—— II Ken

● 神戸女学院大学 文学部英文学科 准教授、会議通訳者

中村 昌弘—— NAKAMURA Masabiro

● 神戸女学院大学 文学部英文学科 准教授、出版翻訳者

田辺 希久子—— TANABE Kikuko

すし、ジョブズから伝記執筆を依頼されたわけですから、心の奥でシンパシーを感じながら書いていた面もあるでしょう。日本語では、例えば文章の末尾の文字一つ二分で感情が微妙に変化することがありますね。そんなニュアンスが出るように、全体を訳したつもりです。

個人でできることなんてしれている。ジョブズは、限界なしに好きなことができた。しかも仕事として成立している。ある意味で、妥協しなかったがゆえに売れている。

(井口)



けではなくて、いろんな方面で人の能力を上げたり拡張したり、できることを増やしたいという思いがいちばん強かったのがジョブズでした。彼がマックintoshシシュを作る前に参考にしたゼロックス社のパロアルト研究所の人たちの中にも、アラン・ケイのようにエニジニアでもありミュージシャンでもある、アートとテクノロジーの両方に通じている人たちがいました。とくにシリコンバレーの近くには、そういう人たちが集まっていました。それが文化的な背景としてあつて、世界を変えるような製品を生み出せたんじゃないでしょうか。

飯 ジョブズはヒッピーやベジタリアンといったカウンターカルチャーの側に立ち、リード大学を半年で中退したあと1年間、興味のある授業だけを聴講しています。設立者でありながらアップル社を放逐され、また復帰するなど、波乱に富んだ人生を送りました。皆さんは、ジョブズのどういうところに魅力を感じておられますか。

中村 自分がこうだと思ふものを、どこまでも追い求めた点が素晴らしい。

異質なものをどう受容していくか、異質なものをどうつないでいくかということに心を向けてきました。通訳・翻訳はそれが具体化される領域です。



(飯)

人に何と言われようと、ダメなものダメと、千回でもノーと言う、すごく強い自己を持っている。「ほら、これがあるとこんなに生活が変わるでしょう」と、自らのビジョンを実現するためのデバイスを提示し、デザインの方によって問題を解決していく。それによつて人々が幸せになっていく可能性を、自らの人生をかけて示してくれた人だと思ふのです。

松尾 この伝記の中に、ジョン・レノンがビートルズのメンバーと「ストロベリー・フィールズ・フォーエバー」の修正を繰り返す作業に感銘を受けたというエピソードがあります。何度か何度も演奏をやり直し、少しずつ完璧なものにしていく方法は、ジョブズの哲学である「完璧な製品の作り方」のもとなつたのです。

改良を重ね、欠点をどんどん削ってシンプルなものにして、なおかつ新しい要素を加える。その工程自体は非常に地道なものの積み重ねなんだということが、この本を読むと分かってきます。

田辺 ジョブズは次々に画期的なアイデアを出し、スマートでかつこい感

元の原稿があり、原文の前には事実があつたわけです。誰かの記憶に基づいて著者が書いている。ジョブズが怒っている様子が浮かぶような英語であれば、日本語版の読者も同じように怒っている彼が想像できないといけない。頭に血が上っている場合は、その状況や雰囲気合った怒りの表現を考えつつ選ぶという感じで訳しました。

中村 私は最初に英語版を読んだとき、著者自身のジョブズに対する愛みたいなものを感じました。今まで他の人が頼んでも受けなかったインタビュー取材を40回ほど繰り返して出来上がった原稿に対して、スティーブ・ジョブズのような立場の人が何も注文をつけないなんて、通常は考えられないことです。

田辺 私は最終章のいちばん最後のところ、ジョブズの本当の気持ちが出ているのではないかと思います。自宅の裏庭に座り、つらい体調に耐えながら死について考えている一節です。インドでの経験、仏教や輪廻に対する



リベラルアーツとは異なる専門職みたいに思われているかもしれませんが。そうではなく、通訳者・翻訳者はそれを選択している人間たちなんだということを、まず分かっていただきたかったです。（田辺）

じなんですけれども、その裏では切った張ったの修羅場が展開されています。それに圧倒されたというか、感動しました。

井口 私は元来、ものづくり系の人間なんです。いまだにちょこちょこ手を動かしているいろ作ったり、売られている製品をばらして作り直したりしています。でも、個人でできることなんてしている。ジョブズは、限界なしに好きなことができた。しかも仕事として成立している。ある意味で、妥協しなかったがゆえに売れている。個人的な感想になりますけれども、何ともうらやましいですね（笑）。

通訳・翻訳は言葉のデザイン

飯 ここで、来年度に開設10周年を迎える「通訳・翻訳コース」の話題に移りたいと思います。このコースは開設当初のスタッフが入れ替わり、新しい教育体制が整いました。「ジョブズの世界を訳す」と題されたイベントは、どのような趣旨で企画されたのでしょうか。田辺 通訳者・翻訳者は、とかく黒子

訳す、ライブで分かってもらう。内容を理解するために前もって勉強しますが、当日、始まったらジェットコースターです。自分の勝手で止まらない。進むしかない。苦しくても、ライブならではの高揚感があります。

意識して練習し幅広い好奇心を

飯 最後に、通訳・翻訳を学ぶ学生へのアドバイスやメッセージをお願いします。

井口 プロの翻訳者を目指すなら、何よりも練習です。例えば、イチロー選手のパットの振りはこんなふうだという話を聞いても、それで自分もできると思う人は誰もいない。ものすごい練習が必要なわけです。それは分かっているけど、なぜか頭を使うことに限って「ああそうなんだ」で終わってしまう。それでは必要なときに使えないものにならない。私は「脳みそ筋肉系」と言っています。脳みそが汗をかくくらい繰り返し練習をして、脳みその中に筋肉をちゃんと作っておかないと、必

私は学生たちに、言葉のデザイン、言葉のデザイナーであると説明していますが、さらに言うとう理解のデザイナーなんです。読者や聴衆という受け手側に、いちばん伝わりやすいかたちに

（中村）



私は学生たちに、言葉のデザイン、言葉のデザイナーであると説明していますが、さらに言うとう理解のデザイナーなんです。読者や聴衆という受け手側に、いちばん伝わりやすいかたちにして出すということですから。理解、分析、表現、そして共感といった、神戸女学院が非常に大切にしている価値の多くに直接かわわっている作業です。作業というのもポイントで、講義をして説明するのではなく、実際にやつてもらわないとうまくいきません。どうしてうまくいかないのか考えながら続けることが大事です。

翻訳はパズル、通訳はライブ

飯 本学では学部で学生を対象に、専攻プログラムとして「通訳・翻訳プログラム」も設置しています。中村先生がおっしゃった教育の狙いは、これから社会に出ていく学部生にとつて、とりわけ大切なことだと思います。

中村 私たちは、大学院と学部をきちんと分けて考えています。大学院の「通訳・翻訳コース」は、通訳や翻訳に直接つながる仕事をする準備のためという色合いが強い。学部の「通訳・翻訳プログラム」は、理解力、分析力、表現力そして共感力を上げていくとともに、日本語と英語の両方で効果的にコミュニケーションをデザインできる人材を育てることに焦点を当てています。そういうコミュニケーションの力

テクノロジーを発展させるだけではなく、いろんな方面で人の能力を上げたり拡張したり、できることを増やしたいという思いがいちばん強かったのがジョブズでした。（松尾）

飯 教師は教えるマシンではなく、学生はプロダクツではない。リベラルアーツ・カレッジは、そういう人間観に立つて行われる教育の場だと思っています。神戸女学院は創立以来、キリスト教主義と国際理解の精神を標榜してきました。そして、異質なものをどう受容していくか、異質なものをどうつないでいくかということに心を向けてきました。

は、家庭、地域社会、職場、どんな場所においても必要です。田辺 大学院のコースは、社会人が中心です。授業は平日の夜と土曜日に集中して行いますから、働きながら通うことができるようになっていきます。飯 井口先生ご自身は、翻訳という仕事のどういうところに面白さや醍醐味があると思われますか。

井口 翻訳する言語が兄弟みたいな言語で、使われている地域も近かったら、置き換えればすんでしまうことも多いのですが、日本語と英語では、言語的な距離も物理的な距離も離れているために、何をどう訳しても「ずれ」が生じてしまいます。意味の範囲が単語ごとに違っていて、どの訳語を選んでも、単語レベル、文章レベルでずれが出てきます。ずれを小さくして、全体を通して読むと元の言葉と同じ方向にいくようにしないといけません。ほかにもポイントはありますが、最終的に仕上げていく過程はパズルを解いているような感覚があり、読んでよかったと言ってもらえるとやりがいもあります。そのあたりが翻訳の面白いところですね。

飯 中村先生、通訳者の場合はいかがですか。中村 翻訳と通訳の作業を比べたときに決定的に違うのは、通訳者の仕事の結果はうたかたの言葉で、すぐに消えてなくなっていくところです。その場の勝負になるので、全部がライブなのです。お話をライブで聞く、ライブで



■井口耕二（いのくち・こうじ）

翻訳家、日本翻訳連盟常務理事、神戸女学院大学大学院文学研究科非常勤講師。東京大学工学部卒業。米国オハイオ州立大学大学院修士課程修了。大手石油会社勤務を経て1998年に技術・実務翻訳者として独立。翻訳活動のかたわら、プロ翻訳者の情報交換サイト「翻訳フォーラム」を共同主宰。著書に「実務翻訳を仕事にする」、主な訳書に「スティーブ・ジョブズ1・Ⅱ」「スティーブ・ジョブズ 驚異のイノベーション」「アップルを創った怪物 もうひとりの創業者、ウォズニアク自伝」「プロダクشن—総表現社会を切り拓いてきた人々とメディア」などがある。

■松尾公也（まつお・こうや）

アイティメディア株式会社メディア事業推進部チーフキュレーター。MacUser元編集長。東京外国語大学芸術系卒業。MZ-80K2EでDTM（デスクトップミュージック）をスタートしてIT業界入りし、当時はMacと言葉という趣味と仕事を一体化していた。アイティメディア社では翻訳関連の仕事を経て、iPhoneやトップページ管理、さらにチーフキュレーターの現在は派遣する情報を選定する鑑定人として手帳を発揮している。プライベートでもリビングでDTMで作品を作ることがあり、楽器はMacとiPhone。ジョブズをポップ・ディランやビートルズに匹敵するアイコンと見なしている。

■飯 藤（い・けん）

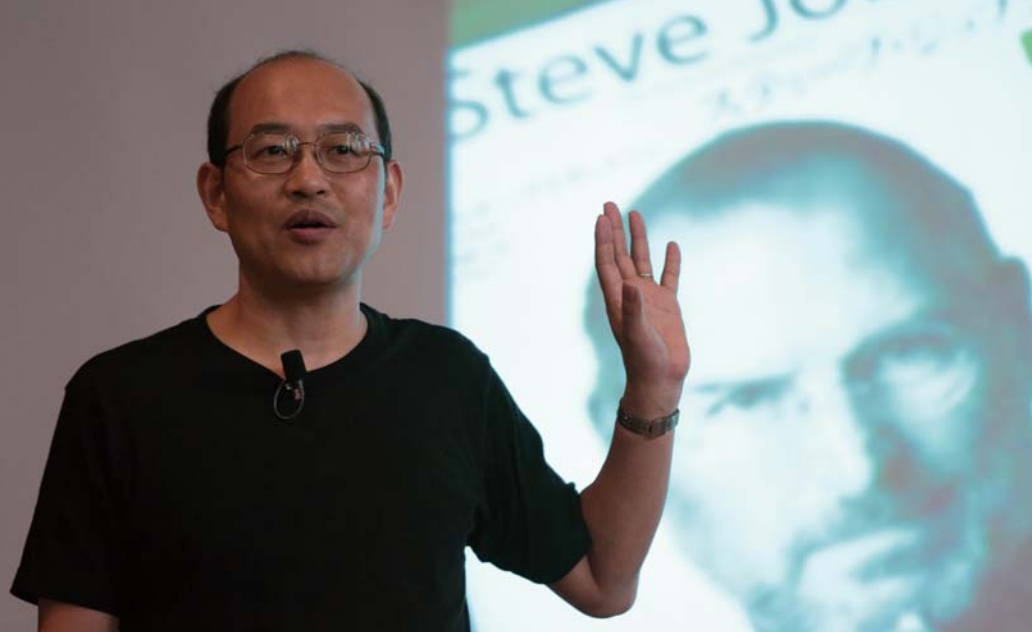
神戸女学院大学文学部。同志社大学神学部、同大学院、スイス・バーゼル大学神学部に学ぶ。専攻は旧約聖書学。博士（神学）。83年に神戸女学院大学助手となり、講師、助教授を経て95年文学部教授、2009年から学長。また、96年から神戸女学院チャブレンを務める。「聖書学の方法と諸問題」「旧約詩篇の文献学的研究」「旧約聖書と様式史」「ヨブ記」などの著訳書がある。

■中村昌弘（なかむら・まさひろ）

神戸女学院大学文学部英文学専攻准教授。会議通訳者。早稲田大学法学部卒業、同大学院法学研究科博士前期課程修了。大阪大学特任助教、東京外国語大学大学院非常勤講師などを経て現職。サイマル・アカデミー大阪校でも通訳講師として10年以上のキャリアを持つ。著書（共著）に「ESP的バイリンガルを目指して—大学英語教育の再定義」「現地なま録音—アメリカ英語を聞く他。高校時代にカリフォルニアでマックに出会い、大学時代は全米の友人たちとマックでメールをやりとり、今も教材づくり、執筆、講義、写真、音楽、ネット、すべてマックで行っている。

■田辺希久子（たなべ・きくこ）

神戸女学院大学文学部英文学専攻准教授。出版翻訳者。東京教育大学教育学部卒業。ベルギーに1年間美術留学。帰国して出版社の編集者。フリーになり、世界歴史・文化関係からビジネス書まで、多数の訳書がある。2001年に青山学院大学大学院国際政治経済学研究科国際コミュニケーション専攻修士課程修了。著書に「英日・日英プロが教える基礎からの翻訳スキル」（共著）、訳書に「人生を複雑にしない100の方法」「ザ・ビジョン」など。2012年3月には通訳・翻訳コースの大学院生・卒業生らと協力して「通訳翻訳訓練」（ダニエル・ジル著、中村昌弘・松尾順子共訳）を出版した。



●基調講演(抄録)

『スティーブ・ジョブズⅠ・Ⅱ』の翻訳作業
猛スピードで世界同時発売を実現

▼頭の中で複数の自分が動いている
今回の出版は世界同時発売という条件で、著者が書いている途中の原稿が3回に分けて送られてきました。セキュリティの問題があるため、各国と

その彼が自分の方から伝記を書いてくれと頼みに行った理由は何でしょうか。子どもたちに自分がどういう人生を歩んだのかを知ってほしいというの、一番の理由だったかと思えます。やっぱり彼は仕事人間だったのです。自分の父親は当時あんなことをしていたのかと、子どもが分かるようなものを残したいと思ったのではないのでしょうか。

ジョブズの行動には、ずいぶんエキセントリックなところがあります。若いころ、果物中心のベジタリアンにはシャワーを浴びる必要がなく、体がおうこともないと信じており、周りの社員は臭くてたまらないというような話もあります。断食や座禅をしたり、インドへ放浪の旅に出たり。当時、アメリカの西海岸には、そういう人たちがたくさんいました。とくに彼は仏教に傾倒していて、結婚式も仏式でした。ジョブズ独特のストレス解消法は、便器に足を突っ込んで水を流すこと。翻訳家は実際に自ら感じる事が大事なので、話に出てきた映画を観るなど、書かれていることを体験してみようと思います。でも、さすがにこれは試してみるのは無理ですね。

その彼が自分の方から伝記を書いてくれと頼みに行った理由は何でしょうか。子どもたちに自分がどういう人生を歩んだのかを知ってほしいというの、一番の理由だったかと思えます。やっぱり彼は仕事人間だったのです。自分の父親は当時あんなことをしていたのかと、子どもが分かるようなものを残したいと思ったのではないのでしょうか。

▼頭の中で複数の自分が動いている
今回の出版は世界同時発売という条件で、著者が書いている途中の原稿が3回に分けて送られてきました。セキュリティの問題があるため、各国と

その彼が自分の方から伝記を書いてくれと頼みに行った理由は何でしょうか。子どもたちに自分がどういう人生を歩んだのかを知ってほしいというの、一番の理由だったかと思えます。やっぱり彼は仕事人間だったのです。自分の父親は当時あんなことをしていたのかと、子どもが分かるようなものを残したいと思ったのではないのでしょうか。



私の通常の翻訳ベースの2倍ぐらいの速さが要求されるが、なんとか一人でやれるだろう、と考えていました。ところが、最初の原稿が到着したのは7月4日。この時点で、予想した文字量を大幅に超えていました。すでにスタートが遅れており、残りの原稿量を考えると、通常の3倍近いペースで進めないと間に合いません。

翻訳という作業の過程では、読者として原文を読み、日本語の訳文の書き手となり、書いたものを日本語側の読者として読むわけです。そして、原文側の読者の自分と訳文側の読者の自分とを見比べている自分がいる。分身というか、複数の人間が頭の中で動いている感じになるので、けっこう疲れます。作業は一日5〜6時間程度にしないと、何年も続けていくことは無理なのです。今回は一日の作業時間が12時間超になり、週末も休まずに続けました。そこへもってきて、10月4日、ジョブズの病状が悪化していきよいよ危ないことを編集者から聞きました。なんと、アメリカ側は11月21日の発行を11月1日に早めるというのです。

それだけではありません。ガラと一緒は無茶苦茶な工程表が届けました。アメリカ側はさらに前倒しして、10月24日の発行となったのです。日本も上巻はその日に合わせて、下巻は11月1日と決まりました。このように、イレギュラーなことばかりの翻訳でしたが、なんとかやり遂げることができました。

私の通常の翻訳ベースの2倍ぐらいの速さが要求されるが、なんとか一人でやれるだろう、と考えていました。ところが、最初の原稿が到着したのは7月4日。この時点で、予想した文字量を大幅に超えていました。すでにスタートが遅れており、残りの原稿量を考えると、通常の3倍近いペースで進めないと間に合いません。



「ジョブズの世界を訳す」●神戸女学院大学大学院 文学研究科 英文学専攻「通訳・翻訳コース」開設10周年記念イベント

第1部の基調講演では、井口耕二さんがジョブズの人物像をはじめ、世界同時発売を目指して厳しいスケジュールで走り続けなければならなかった翻訳作業の経過を語った。それはスリリングと言っているほど、驚異的なスピードを要求された。

第2部のシンポジウムでは、田辺希久子准教授が司会・進行を務め、パネリストに松尾公也さん、中村昌弘准教授、そして、井口さんも加わり、パネルディスカッションを行った。

松尾さんはiPadを手にして、「これ1台で音楽ができてしまう」と言いながら自ら作った歌を披露した。

「DTM(デスクトップミュージック)は、コンピュータを使って書籍を作るDTP(デスクトップパブリッシング)がもとになってきた言葉。DTPは、スティーブ・ジョブズがリベラルアーツの学校であるリード大学でカリグラフィーの授業を聴講したことで実現しました。いろんなスタイルのフォントが自由に使える初めてのコンピュータが、マッキントッシュだったのです」

松尾さんの発言を受けて、中村准教授は「テクノロジーとリベラルアーツの交差点に魔法があると言ったジョブズの言葉は非常に印象深い」と述べた。

「リベラルアーツのリベラルとはリバティと同じ語源で自由、アーツは技という意味で、技術と芸術が合わさったような概念です。誰にも隷属しない自由人として人間に必要な教養、生きていくために身につけていくべき考え方、ものの見方だと、私は理解しています。私たちは自分で気づかないうちに世の中の因習にとらわれ、ある行動パターンを繰り返しています。その目に見えない手枷、足枷から自分自身を解放して、本当の意味で自由になる、自由に考えられる人間になるというのが、リベラルアーツだと思っています」

次に、翻訳の問題に移った。田辺准教授は「訳文に関する読者からの質問に、井口さんはご自身のブログで、たいへん良心的にお答えになっています」と言って、原文をあえて変えている場合の具体例も挙げた。

例えば「ジョブズはリサを連れて東京へ行き、機能美にあふれたホテルオークラに泊まったことがある。エレガントな寿司店で、ジョブズは穴子を頼んだ」という訳文。井口さんの説明はこうだ。

「“Elegance”と、はつきり『うなぎ』だと書かれています。それでも日本語版はあえて『穴子』としました。ホテルオークラの寿司屋に問い合わせたところ『穴子しか置いていない。うなぎは置いていないし、過去、置いたこともない』と言われたからです。私はうなぎの寿司が好きなのですが、高級な寿司屋には置いていない。日本人として、ちょっと気になるところでした」

シンポジウムの最後に、パネリストが来場者からの質問にも答えた。

マルチメディアの進化と共に

● 情報通信技術整備の「架け橋」として——



● 人間科学部 環境・バイオサイエンス学科
出口 弘 教授——DEGUCHI Hiroshi

昨今のマルチメディアの進化には目覚ましいものがあり、大学の情報環境や情報教育もそれに追随する形での充実が必要とされている。本学に着任以来、学内における情報システムの環境整備や情報教育推進の中心的役割を担い、国際ネットワーク化推進委員会(INPC)委員長、情報処理センターディレクターを務める出口弘教授に、本学の情報通信技術(ICT)環境の発展や国際化に向けたシステム構築等について話を伺った。

本学の情報通信技術(ICT)教育を
考える

—— ICT環境整備担当として、どのようなことを進めてこられたのですか？

出口 1995年に着任し、最初に行ったのは学内のインターネット接続です。その後、1997年に完成したジュリア・タッドレー記念館に情報科学教室システムを整備し、それを核に本格的なキャンパスLANを構築しました。以降、教室システムの更新や機器更新等を経て、2003年のシステム更新では学生寮にもキャンパスLANを拡大。常にアップデートしていくコンピュータやソフトに対し、可能な限り追従するよう3～5年ごとに更新を続けています。

—— キャンパスLAN拡大の際に新しく設けられたCALL教室とその後マルチメディア(MM)教室は、画期的だったと伺います。

出口 当時、他大学では既にCALL教室は普及していましたが、通訳ブースを備え、それを組み入れた形で授業ができるという本学のシステムは珍しく、このようなCALL教室を設けたことにより、2004年度には大学院文学研究科に通訳・翻訳コースを開設することができました。

また、MM教室は、当時本学にはコンピュータを使用する授業のための教室と、通訳の授業を行うための教室が

必要であり、しかし講義室を減らせないなかで、ディスプレイを収納して通常の講義もできる多目的な教室として2006年夏に整備しました。防音された本格的な同時通訳ブースとビデオ会議システムを備えたこの教室を見せたいと、他大学からの訪問もありましたよ。MM教室の整備により、海外の大学とシステムを繋ぎ、英語で話す先生の講演等を日本語に訳し、それを本学の学生が聞くといい、遠隔同時通訳システムを授業に取り入れることが可能になりました。

—— それに伴い開発された、通訳トレーニングを核とする語学学習用プログラムとは？

出口 「通訳トレーニング法を活用した英語教育」英語運用能力向上の新しいプログラム(現「通訳・翻訳プログラム」)は、通訳トレーニングの技法を語学学習に活用しようというプロジェクトとして、平成16年度現代GP(文部科学省・現代的教育ニーズ取組支援プログラム)に採択されました。これは、通訳者・翻訳者の養成に特化したものでなく、独自のトレーニング法を使って、様々な職場領域で英語を使って社会貢献できる高度な英語コミュニケーション能力を持った人材の育成を目的としたプログラム。学内外での学会や講演会等の場で、同時通訳を実践するといったOJT「学際的分野の海外連携授業支援」を採り入れていることも特長です。

—— 現代GPの「環」について、e-learningのソフトウェアであるKC-ESの共同開発もされていますね。

出口 はい。大学での授業は通常、各科目週に1回90分ですが、語学のような反復が必要な授業では、学習した記憶が1週間後には薄れる忘却現象が多く見られます。そこで、インターネット環境さえあれば、いつでもどこでも課題のやりとりが行えるソフトウェアを、と考案したのがKC-ES(Kobe College Educational Software)です。学生は、専用のソフトを使って課題の動画教材である映像付きの音声聞きながらシャドウイングや同時通訳をし、それを録音、再生確認して練習します。録音した音声等は課題ファイルとして提出することができ、教員からのコメントやフィードバックも可能です。

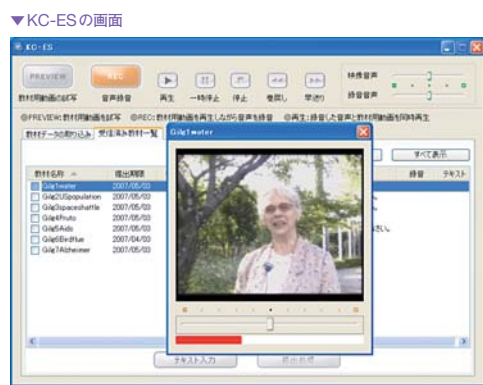
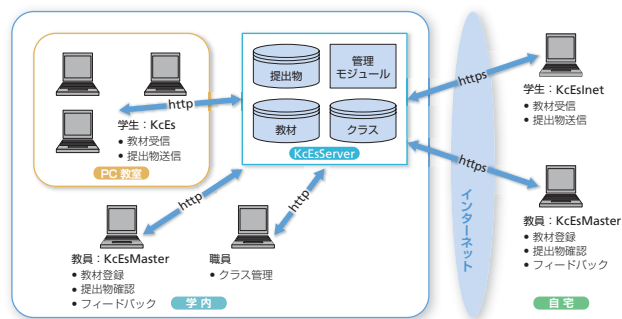
—— 学生の反応はいかがでしたか？

出口 私は情報環境を整え準備する立場なので、授業等で学生の反応を直接は受けていませんが、授業担当教員からは「学生も喜々として学習している」と聞いています。実際、これらのシステムで学んだ学生が、将来どのように成長したのかを知りたいものですね。

—— 本学のICT環境の特長は？

出口 本学のICT環境は、小規模であることがメリット。声をかけると関係者がさっと集まり、創り上げることができます。規模の大きな大学ではなかなかそうはいかないように、専門家がシステム関連の担当をしている場合が多いため、教員にとっての使い勝手の良さが理解されにくいという問題もあります。本学の場合、私は専門家というよりは、授業を行う教員と通訳者、

■ KC-ES(Kobe College Educational Software) システム



事務担当、システムメンテナンス担当の架け橋のような存在。自身も教員なので、他の教員が求めているシステムの内容を理解できる立場です。システムありきではなく、教員にとっての使い勝手の良さを優先して整備できると言えます。

ICTの活用による教育の国際化

——INPC委員長や情報処理センターディレクターという立場からは、どのような活動をされているのですか？

出口 2008年度に大学教育の国際化加速プログラムとして、『遠隔同時通訳システム』による国際化推進に取り組みました。これはOJTによる大学院生通訳教育と学部教育への貢献であり、同時通訳やビデオ会議のシステムを用い、海外と連携して事業展開していくものです。コラド大学で現地の授業方法を学んだり、国立台北芸術大学に小型のHDビデオ会議システムを導入し遠隔授業を実施したり、同時通訳者の先端的な教育を行っているジュネーブ大学の視察も叶い、結果的にこの年は、海外8校との遠隔接続を実現しました。通常の講義だけでなく、音楽、舞踊等様々な授業を遠隔で行ったことにより、多くの実りがありました。

また、2009年度には「音大連携による教育イノベーション——音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて」という本学・昭和音楽大学・

シオンし、発表させるといってお膳立てをしないと、課題が解決できない。このような学生の現状を変えて行く必要があります。コンピュータを使いこなせる、エクセルやパワーポイントを使い資料を作って発表できる等のITスキルが重要視される一方で、マルチメディアの進化とは相反することですが、社会に通用するアナログ力、対人関係能力も養わなくてはならないのです。

また、パソコンから携帯電話、スマートフォンと、情報通信のデバイスはどんどん小型化されています。今後は、iPad等、学生が持ち歩くデバイスを授業に取り入れるとどうなるか？課題をメールでやりとりしたらどうなるか？等を検討し、気軽に勉強できる環境作りを行う必要があるのかもしれない。私の方でも、環境の変化に合わせて、使いやすいものを作ってみようと考えています。

——自身の今後の展望は？

出口 今年度から環境・バイオサイエンス学科に所属が変わったこともあり、理数分野の教育支援教材を作り、授業に取り入れたいと思っています。近年、理数離れが進んでいます。学生がつまづいた際に「学ぶことは面白い」ということを知るきっかけ作りをしたいのです。また、本学科は高校時代に文系を選択していた学生も理系の分野を専攻できます。文系出身の学生の理数系学力向上にも、マルチメディアは役立っ

東京音楽大学の3大学共同プロジェクトを立ち上げ、文部科学省・大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラムにも選定されました。

現在は、大学院における研修プログラム「地域から*ESDを推進する女性環境リーダー」に取り組んでいます。これは、地域を活性化する国際的な女性リーダーの育成を目指すもので、アジア・アフリカ各国から留学生を受け入れ本学院生と共に研究したり、ビデオ会議システムを用いて他大学の教員の授業を受講したり、帰国後の連携も図ります。

*ESD：持続可能な発展のための教育

——今後の課題は？

ニーズがあつてこそその情報環境整備なので難しいところですが、通訳を挟

み、海外と連携した授業を行うプロジェクトがさらに増えるよう貢献したいですね。当然のことながら、プロジェクトには学内予算や外部資金が必要です。推進のための母体がINPCであり、その委員長として、なるべく多くの教員の声を吸い上げながら進めていきたいと考えています。

マルチメディア教育の今後

——マルチメディア領域の進化に伴い、今後、大学はどのように対応していくべきでしょうか。

出口 最近の学生は、対面ではなく携帯メールでのやりとり慣れており、人と接して会話することが苦手になってきています。例えば、本学では上級生が情報関連の授業に入り、下級生のサポー

マルチメディアの進化とは相反することですが、社会に通用するアナログ力、対人関係能力も養わなくてはならないのです。

トをするSA(スチューデントアシスタント)制度を導入しています。以前の学生は自ら先輩SAに質問をし問題を解決する、先輩は後輩SAの面倒を見るという上下関係の中で自立的にSAコミュニティを機能させていました。しかし最近では、スキルアップトレーニングと称してテーマを与え、ディスカッ

■出口 弘(てぐち・ひろし)

大阪大学工学部電子工学科卒業後、同大学院工学研究科博士後期課程電子工学専攻修了。米国イリノイ大学計算機科学科客員研究員を経て、大阪大学工学部助手に。その後、同大学の大型計算機センター講師として、キャンパスネットワークの整備、大型計算機やスーパーコンピュータの更新に関わる一方、計算結果の可視化システムの構築や利用に関する共同研究等、教育・研究の環境整備を行う。1995年より本学人間科学部助教授として着任し、2006年より同学部教授。現在、INPC委員長、情報処理センターディレクターを務める。



脳の活動から見えない事象を読み取る

計算論的神経科学の領域におけるブレイン・デコーディング



●日本の技術をイギリスへ

『計算論的神経科学』の領域で、コンピュータ上のシミュレーションとfMRIを用いた脳活動計測実験を行い、記憶や予測、学習等の高次機能を司る前頭前野の機能解明に尽力する吉田さん。脳イメージングの研究をするためにイギリスに渡り、研究先のUniversity College London (UCL)では、相手の行動からその意図を推定する「心の

理論」といわれる機能を研究し、前頭前野における複数の異なる部位の活動が、心の理論における様々な要素と関連することを解明してきた。今年3月からは脳情報科学、生活支援ロボットや無線通信等、情報通信関連技術に関わる先駆的な研究を推進する国際電気通信基礎技術研究所(ATR)で研究を進めている。「イギリスには興味深い課題が多くあるけれど、研究解明するための技術が少し欠けているように感じ

ます。その点、日本はマシンを動かす技術やデータ解析等の数理的なテクニクに優れています。ATRで日本に特化したブレイン・デコーディング(脳に符号化されている情報を解読する研究分野)の技術を学びたいと思い、数年間の予定で日本に戻りました。」

●脳の活動から見えない事象を推測

脳のデコーディングはATRが先鋒を行く研究分野であり、また世界的に

●脳科学研究者・理学博士
吉田 和子 さん——YOSHIDA Wako

環境との相互作用や学習により、日々刻々と変化している脳——。その機能を、行動心理学や経済学において提案された理論的モデルと脳活動計測を用いた実験結果を融合させ、数理モデルで説明しようとする試みが『計算論的神経科学』だ。常に最先端の研究領域に身を置く吉田和子さんの研究心は発展し続けるこの領域において、尽きることがない。



も注目されている神経科学、工学、数理学の融合研究分野だ。これまでに研究されてきたニューロイメージングは、「見る」話」といった人の行動や刺激が脳のどこをどの部位をどのように活動させているのかを調べるというもの。現在では、脳の活動から人の行動や刺激を読み取る研究が進められており、米科学雑誌ニューロンに発表された研究では、被験者にアルファベットを見せ、視覚野の脳活動からどのような文字を見ているのかを推測することに成功している。「私達、神経科学チームが行おうとしているのは、さらに高次な脳機能を扱う実験。実験者にはわからないこと——例えば、被験者が行った

いと思う(＝行動)方向や、映像(＝刺激)から想像した風景等、目に見えない事象の推測です。この技術を神経科学の分野から解明し、障害をもつ人に応用する等、人と人とのコミュニケーションを円滑に行う目的に使えないかと考えています」。

●人の心理を綺麗に説明したい

もともと人間の心理に興味のあった吉田さんが情報処理学の分野を志したきっかけは、大学で認知情報処理のゼミを担当していた三浦欽也先生との出会い。心理学を深く学ぶにつれ、「心理学の事例は膨大にあるけれど、よくよく調べてみると相反する結論も多い。

「まだ解明されていない分野の事象を、新たな切り口と手法を用いて解き明かしたい」



■吉田和子(よしだ・わこ)
1998年神戸女学院大学人間科学部人間科学科人間行動科学専攻(現：同学部心理・行動科学科)卒業。2000年奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科情報処理学専攻博士前期課程修了。2003年同研究科情報科学専攻博士後期課程修了、博士号取得。以降、同研究科博士研究員を経て、特任助手として計算モデルを用いた脳イメージング研究に従事。2007年、日本神経回路学会において論文賞受賞。2007年よりUniversity College London 博士研究員として社会的行動の計算モデル構築と脳機能解明に関する研究に携わる。2012年より株式会社国際電気通信基礎技術研究所(ATR)脳情報研究所主任研究員。

は、国際的な研究教育コースで知り合ったUCLの友人達から「来たら？」と言われたのが発端。無理だと答えると「日本人は無理って言ってアプライしない。なぜ？」と言われた。「それもそうだし、国際会議に行ってUCLの研究所長とお会いし、空きポストがあったので研究員になりました。私は運がいいんです。人に恵まれています」と、サラリと語る。しかし、運だけではない。周囲の人が示す道を選択したのは吉田さん自身であり、研究に進進していたからこそ、次々と道が開かれたのだ。

そんな吉田さんに研究のやりがいとは問うと、「？」と首を傾げた。脳活動計測技術がCT(コンピュータ断層撮影法)、PET(陽電子放射断層撮影法)、MRI(核磁気共鳴画像法)、MEG(脳磁計)と進化してきたように、脳科学の可能性はどんどん広がるが終わりはない。そんな最先端の研究領域を歩み続けている彼女にとっては、違和感のある言葉だったようだ。「研究は何年も答えが出ない。それを続けさせて貰え、楽しいし飽きません。もちろんストレスはあるし、失敗するという恐れもある。出来ると信じていないと絶対に出来ないと思います。これから、ブレイン・マシン・インターフェース(脳活動から脳内情報を解読し、外部機器の操作を行う、脳を介した新たなコミュニケーション技術)の研究を行い、将来的には日本から世界へ技術を輸出できればと思っています」。

● 文学部総合文化学科新カリキュラム

学びのテーマを探る楽しさを ～総合への意欲と力を育てる～

神戸女学院大学総合文化学科では、2013年度より新カリキュラムの運用を開始する。今回の改革により、従来の4つのコースは新たに8つの専攻科目群に再編され、学生は異なる科目群を自由に組み合わせて履修し、『総合的な学び』を深めることになる。さらに、フィールドワークを軸としたプロジェクト科目による『体験的な学び』や、少人数ゼミによる『読み・書き・まとめる力』の養成も強化され、能動的・行動的に学ぶ力を修得できるとして高い期待が寄せられている。新カリキュラムの構想から具体化まで、中心的な役割を果たした石川康宏教授に話を伺った。



●文学部 総合文化学科
石川 康宏 教授
——ISHIKAWA Yasuhiro

——新カリキュラム導入の理由とその特色をお聞かせ下さい。
自分で選んだ複数の知の領域を、学生がそれぞれの方法で結びつけ、物事を複眼的にとらえることの楽しさや大切さを体験してもらいたい——そういう願いをこめてつくりました。これまで

——新たにプロジェクト科目も開講されますが、どのような内容なのでしょう。
教室でのしつかりした学びにくわえて、体験を通じた学びを重視するのがプロジェクト科目です。現場の空気や建物、資料、人々の考え方や服装、文化、食べ物なども肌で感じてもらいます。ここでも総合性を重視し、1つの科目をできるだけ専門の異なる複数の教員で担当するようにしています。例えば「沖縄を学ぶ、沖縄で学ぶ」は、

——運用にあたり、教員側の意識改革も必要になりそうですね。
例えば、私の専門は経済学で、これまでも経済の基本にわかって女性の雇用、主婦の役割、国ごとの経済制度の違い、経済思想などをやってきましたが、さらに大きく幅を広げる必要が出てきます。ゼミの中には、福祉や文学や哲学、

歴史などを副専攻科目群に選ぶ学生も出てくるでしょうから、その点では教員にも新しい努力が必要です。そうした意識改革のきっかけとして、これまで総合文化学科では「神戸女学院大学総合文化叢書」を毎年刊行してきましたが、これとは別に、新カリキュラムの実施にあわせて『日常を拓く知』という4冊のシリーズ本を出版することになっています。若い教員が中心となった企画ですが、私には、プラトンの専門家である高橋雅人先生と「ハチミツとクロバー」をもとに恋愛について語り合えという無理難題(笑)が課されています。新しい角度からのいろいろな論文も掲載される予定です。

——これからの学生に望むことは？
教員は「この分野とこの分野を結びつけて、こういう卒論を書きなさい」とは言いません。与えられるのを待つだけでなく、自分から工夫し、組み立てようとする学生の能動性を導きたいと思っています。

受験生のみならずには、これまでの知の枠組みをこえ、新しいテーマを探し、そのために様々な領域を歩きまわること。「不安」に思うのではなく、「楽しい」と思うことができる——そういう意欲と楽観性をそなえた方を期待します。見つけ出すテーマの奇抜さで、私たちが驚かせたり、困らせたりすることに喜びを感じたいというような方も大歓迎です(笑)。どうぞ、いらして下さい。

新カリキュラムでの学び 3つのポイント

1. 2つの専攻科目群を組み合わせる「総合的な学び」

1～2年次には、8つの専攻科目群を自由に学び、3年次でメインを1つ、サブを1つ選びます。異なる専攻科目群を深めながら組み合わせ、総合的な学びを進めていきます。



2. 教室内だけで完結しない「体験的な学び」

「プロジェクト科目」では、フィールドワークを軸に、行動的に学びます。3年生以降の専攻ゼミでも「外に出て、行動的に」学ぶカリキュラムが組まれます。

●2013年度、開講する6つのプロジェクト科目

- 「沖縄を学ぶ、沖縄で学ぶ」
- 「ひと・まち・文学」
- 「インド人学生に日本文化の魅力を伝える」
- 「フィールドで学ぶ現代インドの諸問題」
- 「戦争と平和を考える」
- 「中国で体験する異文化」



●戦争と平和を考える



●インド人学生に日本文化の魅力を伝える



●沖縄を学ぶ、沖縄で学ぶ



●中国で体験する異文化

3. 4年間の少人数ゼミで身に付ける「読み・書き・まとめる力」

1～2年次のゼミではレポートの作成、教員による添削、文献の講読、学習成果の発表などで、「読み・書き・まとめる力」を養います。3～4年次の専攻ゼミでは、専攻科目群を組み合わせた総合的な学びの集大成として卒業論文をまとめます。

国境を越え、 音楽の楽しみ方を深める

●オーストリア・モーツアルテウム音楽大学 教授・学生
来日に伴う、神戸女学院大学音楽学部との交流行事

5月11～20日まで、オーストリア・ザルツブルグの
モーツアルテウム音楽大学から教授(ヴァイオリン)と
学生2名(弦楽器)が神戸女学院大学に来訪。
学生交流コンサートや公開レッスン、室内楽ワークショップ等、
数々の交流プログラムが開催され、相互の友好を促進すると共に
音楽の楽しさを改めて実感する有意義な10日間となった。

◀ドヴォルザークのピアノ五重奏。美しい音色に会場中が酔いしれた
▼(写真下・中、右)共に音楽創りに取り組み、かけがえない時間となった学生交流コンサート
(下・左)高校生のためのヴァイオリン特別公開レッスン



No Photo



No Photo

(左から)クレメンスさん、佐々教授、ハンナさん
ロチェック教授、辻井准教授

10日間の交流を終えて

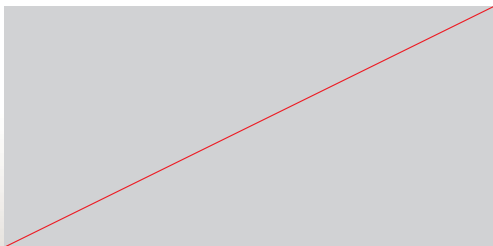
●音楽学部 音楽学科 佐々 由佳里 教授

ハンナさんとクレメンスさんが自由な発想とたく
さんのイマジネーションを持って音楽を楽しむ姿は、
本学の学生達に強い印象を与えたようです。最初
はあまり表情に変化のなかった学生達が、目をキラ
キラと輝かせて演奏している姿は感動的でした。
ロチェック教授と二人の学生が残してくれた多くの
遊びが学生達のエネルギーとなり、これからの
活動の原動力になってくれる事と思います。

本学を訪問したのは、パウル・ロ
チェック教授(ヴァイオリン)と同大学
学生のハンナさん(チェロ)、クレメン
スさん(ヴァイオリン)。15日には音楽館
ホールにて、学生交流コンサートが
行われ、本学からはヴァイオリン学生
やピアノ学生が参加。チェロ、ヴィオ
ラとのデュオや弦楽五重奏曲等を披露
した。18日には講堂にて、フレンドシッ
プコンサートが行われ、ロチェック
教授と同大学学生による弦楽三重奏曲
に続き、音楽学部の佐々由佳里教授(ピ
アノ)、辻井淳准教授(ヴァイオリン)を
加えたピアノ五重奏が演奏された。来
場者は260名にも及び、会場は熱い
拍手に包まれた。

■Paul Roczek (パウル・ロチェック)

1947年ウィーン生まれ。Franz Samohyl、Max Rostalにヴァイオリンを師事。学生時
代よりウィーンフィルハーモニー交響楽団のメンバーとして活躍した後、ウィーンフィル
ハーモニーのメンバーとして活動。国際コンクールで数々の受賞後、オーストリア弦楽四重奏団を
結成し、30年間に亘り第一ヴァイオリン奏者として世界各国で演奏する。現在も世界各
地で演奏活動を展開しており、1969年よりモーツアルテウム音楽大学で指導にあたる。



No Photo

日本滞在中に京都文化も体験した、ロチェック教授とハンナさん、クレメンスさん

期間中、ロチェック教授は本学音楽
学部ヴァイオリン学生3名への公開
レッスンや、高校生のためのヴァイ
オリン特別公開レッスン等も開講。本学
ピアノ学生のモーツアルテウム音楽大
学への長期受け入れの提案も頂き、今
後の交流にも期待が寄せられる。

●音楽学科舞踊専攻学生による台湾公演

その一瞬に感動を刻む



●音楽学部 音楽学科 舞踊専攻

島崎 徹 教授——SHIMAZAKI Toru

水野 さん 岡 さん
(4年生) (3年生)

■島崎 徹(しまざき・とおる)
振付家として、作品は世界各国の舞踊団のレパートリーになっ
ている。宝塚歌劇団や東宝ミュージカル「エリザベット」などの
振付も手掛ける一方、シルク・ドゥ・ソレイユのキャスティングパ
ートナーも務める。1999年、2011年にはローザンヌ国際バレエ
コンクール審査員を務め、同コンクールの課題コンテンポラリー
ダンスの振付を担当。2005年より神戸女学院大学教授に就任。

『2012 International Festival of Dance Academies』 Move closer to each other with dancing!

7月18～21日の4日間、台湾Taipei Metropolitan Theatreにおいて『2012
International Festival of Dance Academies』が開催された。この祭典は1986
年より行われており、今年は世界各地から8大学が招待され舞踊を披露。日本から
は本学音楽学部音楽学科舞踊専攻の3・4年生が出演し、校舞ともいえる“HERE
WE ARE!”と、GALAでは4年生が“VOICES”を熱演。初の海外公演の手応え
や感動を、専任教員であり振付師でもある島崎先生と水野さん、岡さんに聞いた。

——初の海外公演、手応えはありまし
たか？
水野 もともと『HERE WE ARE!』は
ウケる演出だと思ってはいたのですが、
会場から予想以上の手拍子や笑いが起
こって驚きました。
岡 フリーの部分は事前にほとんど決
めないで踊るんですが、今回の公演で
「場の感動を瞬間に刻む」という感覚を
はつきり掴むことができました。
島崎 日本は客席が静か。海外では観
客が思い切り笑ったり、叫んだり、手
拍子したりするので、ダンサーは反響
をダイレクトに感じる事ができるの
でしょうね。台湾公演では客席から
「Amazing」と声があがり、スタン
ディングオベーションも受けました。
ダンサーは、特にフリーの部分でウケ
ていることを感じると、これでもか！
とノッて踊ります。観客が自分の思い
通りに反応してくれるという経験は、
人生で何回も味わえるものではありません。
今回、彼女達は舞台人として貴重
な経験をしたと思います。

No Photo

初の海外公演について語る、島崎教授(中央)と水野さん(左)、岡さん(右)

——大成功だったんですね。舞台上
が、緊張しませんでしたか？
水野 緊張するよりも、早くお客さん
の前で踊りたかった笑。
岡 楽しみでした。私達は、もし失敗
しても笑いに変えられます。これまで
踊ってきた分だけ、知恵や発想がある
から。
島崎 授業の中でそれだけ練習してい
ますから、ダンスが身体に染みついて
いるんです。彼女達は僕の振付を全身
で理解しているので、ある意味におい
ては、プロのダンサーよりも上手に動
きますよ。
——島崎先生の振付で踊ることをどの
ように感じていますか？
水野 先生の振付は、絶対に、観る者
を感動させるようになっていきます。そ
のことをわかっていて信じているから、
何を踊るにしても迷わずできます。
岡 一つひとつの動きが計算され、緻
密に構成されていることに衝撃を受け
ます。美しく魅せるための身体のライ
ンが考えられていて、それが大事。練習
しないとそのラインは出せないんです。
島崎 振付師はダンサーにとつてのプ
ロモーター。僕の振付で踊ることによ
り、彼女達が本来の姿以上のダンサー
として観客の目に映らなければ、振付
師としての価値はありません。僕と彼
女達は共通言語で話しているようなも
ので、お互いに理解し、信頼し合っ
ている。観客は、舞台を観てそれを感じ、
感動するのです。

“納得のいく就職活動”を支援する

KCキャリア塾 開 講

神戸女学院大学キャリアセンターは、夏休み期間中、就職活動を控えた3年生の希望者を対象とする『KCキャリア塾』を開講した。今回の受講対象者は、長期的なキャリア形成を前提とした就職を目指す学生とし、総合職や特定総合職(エリア総合職)に興味を持つ学生約20名が参加。

全6回の講義には、日経就職ナビを運営する㈱ディスコより講師を迎え、前半は教室内での講義やグループワーク、後半は大阪市内のオフィス街に出て企業を理解するフィールドワークと、その結果を元にしたプレゼンテーション等が行われた。新たな試みである『KCキャリア塾』を企画運営したキャリアセンターの樽本課長と松本氏に話を聞いた。



●キャリアセンター 課長 樽本 裕見子 さん
●キャリアセンター 松本 崇 さん

— KCキャリア塾とは？ また、開講の目的は？

樽本 厳しい就職状況の中、学生には大学生活の集大成として、納得のいく就職活動をして欲しいと願っています。KCキャリア塾はそのための足掛かり。学生が就活や働く上で必要になるスキルや考え方を身に付ける、本学ならではの取り組みです。

松本 本学には、就職に対し、高い意識を持つている学生が多くいます。今回はそういった学生への支援を目的に、就活の現状に詳しい武田氏を講師に招き、総合職に興味のある学生を対象に開講しました。

— オフィス街で行われたフィールドワークは、どのような内容だったのでしょうか。

樽本 学生を船場、本町、中之島へと、5つのグループに分け、その街の企業

ボランティア活動から見えてきた これからの自分

今年3月、本学のボランティアサークル“神戸女学院大学 Harapan Habitat”は、世界約100カ国で居住建築支援活動を行う“Habitat for Humanity”の日本支部の海外建築ボランティアプログラム「グローバル・ヴィレッジ(以下GV)」に参加し、他大学の学生と共にカンボジアでの建築活動を行った。本学からGVへの参加は、2010年のインドネシア、2011年のインドに続く3回目。参加は2回目という文学部4年生の松島さんと、初参加となった文学部2年生の出野さんに話を聞いた。



●文学部 総合文化学科 4年生

松島 さん

●文学部 英文学科 2年生

出野 さん

No Photo

カンボジアでのGVに参加した松島さん(右)と出野さん

— カンボジアで、どのような活動を行ったのですか？

松島 複数のチームが順番に現地を訪れ、3カ月程かけて家一軒を建てます。私達はその一番最初の工程を担当。建築技術を持つスキルワーカーと住居を必要とするホームオーナー、日本からの学生14名が協働で穴を掘り、レンガを運んで家の土台を作りました。

出野 想像以上に体力勝負。気温は35

〜6度、湿度も高いうえに砂避けのマスクがさらに暑くて、熱中症になりそうでした。男子は力があるので他の作業もあつたんですが、女子はずっとレンガ運びで…。レンガが無限にある気がした(笑)

— 現地の人とはどのような交流を？

松島 ほとんどゼスチャーでしたが、「一生懸命作業してくれて嬉しい」と言ってくれたのがわかり、来た意味があつたと思いました。昼休みには今住んでいる家を見せて貰い、食事にも招

を自由に調べて貰いました。その後、街の歴史や特徴、そこで働く魅力等のプレゼンテーションを行いました。臆することなく大手企業を突撃訪問し、交渉して人事の方に会ってきたグループや、試供品を貰ってきたグループもありましたね(笑)



松本 本学の学生はお嬢様と見られがちですが、私達が考える以上に、彼女達は積極性と行動力を持っています。実際、総合職でバリバリ働いている卒業生も多いです。

— 今後の展望を教えてください。

樽本 後期も月1回のペースで継続し、面接やエントリーシート対策はもちろん、グループディスカッションをしたり、内定学生やOGを迎えて話をして貰う予定です。

松本 就活が本格的に始まると、励まし合い、時には厳しいことも言い合える仲間が必要になってきます。「就活はチームで」という体制作りも強化していきます。

●参加学生の声

- 「就活に対して漠然とした不安があつて、何が不安なのかを知るために参加しました」
- 「企業研究や自己分析の方法がわかった」
- 「積極性が身についたと思います」
- 「街頭インタビューで新入社員に対してどう思うかを尋ねたら、「ゆとり世代だからという言い訳は通用しない」と、言われたことが心に残っています」
- 「不安が楽しみやがんばる気持ちに変わった」
- 「グループワークで、街頭インタビューや突撃企業訪問をしたことが一番印象的でした」
- 「仕事内容ややりがい、企業の課題まで聞くことができました」

■武田氏からのメッセージ

神戸女学院大学は、これまでの就職実績や女子大というイメージから、世間からは金融・保険業界の一般職に強いと思われる傾向にあります。もちろん、それは間違いではありませんが、学生にはこうした固定観念に囚われず、総合職に進む道も視野に入れた就職活動をして欲しいと思います。また、内定が最終目標ではありません。良い意味での“女学院らしさ”は継承しつつ、それを超える社会での活躍を期待します。

●講師 武田 佳久 氏 株式会社ディスコ 関西支社 学生広報課に所属。各大学での就職・キャリア関連講座の講師として幅広く活躍中。

待されました。家の床が落ちそうで…、現地の暮らしがよくわかりました。

出野 地雷博物館や戦争博物館にも連れて行って貰い、カンボジアの歴史を学びました。今まで漠然としが知らなかったことが、ぐっと身近になりました。

— 今回、得たものは何でしょうか？

出野 大学生のうちに何かしたいという想いと海外への興味から、自発的に参加しましたが、メンバー達と毎晩のようにミーティングをして、そのモチベーションの高さに刺激を受けました。行動しないと何もできない！って。私は来春から1年間、ニューヨークに留学します。前半は学校が決まっていますが、後半はその時の自分次第。大学や専門学校で学んでもいいし、主体的に行動して決めたい。カンボジアでの経験は、人生を考えるきっかけになりました。

松島 私はこれまでの経験やノウハウを生かすために、次のGVに副リーダーとして参加します。1回目にインドを訪れた時はちょうど日本で東日本大震災が起こり、たくさんの方が「日本が大変だ。大丈夫か？」と心配してくれました。カンボジアでも、ボランティアをしたという感覚はなく、逆にして貰ったことの方が多かった気がします。現地の人が私達の活動を喜んで泣いてくれたりしたことで、私も人の為に何かできたと感じています。この活動を通して学んだことを、今度は後輩に伝えたいんです。



講演会・公開講座・学会・コンサートなど

- 秋季公開講座2012
 - 日時：第1回 11月17日(土)10:00～11:30
コミュニケーション—出会い。岡田山キャンパスを想うあるアメリカ人。
 - 第2回 11月24日(土)10:00～11:30
災厄・映像・文学 9・11と11年の持続
 - 第3回 12月1日(土)10:00～11:30
メディアと“事実”
- 講師：第1回 近畿大学文芸学部教授 内藤 能 氏
第2回 神戸女学院大学文学部英文学科 専任講師 高村 峰生
第3回 神戸女学院大学文学部総合文化学科 専任講師 景山 佳代子
- 場所：第1回・第3回…神戸女学院講堂
第2回…神戸女学院大学文学部1号館
- 問い合わせ：広報室 TEL0798-51-8585

音楽学部演奏会・公演・その他のイベント

- 舞踊専攻第4回卒業公演
 - 日時：第1回11月29日(木)～12月1日(土)
11月29、30日…18:30開演
12月1日…13:00開演、18:00開演
 - 場所：神戸女学院大学エミリー・ブラウン記念館 スタジオA
 - 入場料：1,000円
- 定期演奏会 MESSIAH
 - 日時：12月4日(火)18:30開演
 - 場所：兵庫県立芸術文化センター KOBELCO大ホール
 - 入場料：2,000円
- オペラ実習発表会
 - 日時：2013年2月14日(木)時間未定
 - 場所：神戸女学院講堂
- 卒業演奏会
 - 日時：2013年2月25日(月)～27日(水)18:00開演
 - 場所：神戸女学院講堂
- 舞踊専攻第7回公演
 - 日時：2013年3月7日(木)～8日(金)時間未定
 - 場所：兵庫県立芸術文化センター 阪急中ホール
 - 入場料：未定
- 新人演奏会
 - 日時：2013年4月18日(木)時間未定
 - 場所：いずみホール
 - 入場料：1,000円
- 修了披露演奏会
 - 日時：2013年4月24日(水)時間未定
 - 場所：兵庫県立芸術文化センター 神戸女学院小ホール
 - 入場料：1,000円
- 問い合わせ：音楽学部事務室 TEL0798-51-8550 FAX0798-51-8551
E-Mail: music@mail.kobe-c.ac.jp

金曜日公開プログラム

- クリスマスオルガンコンサート
 - 日時：12月7日(金)10:35～11:25
 - 出演：学院オルガニスト・西山聡子、オルガニスト・追中宏美
 - 場所：神戸女学院講堂
- チャロルを歌おう
 - 日時：12月14日(金)10:35～11:25
 - 指導：神戸女学院大学音楽学部音楽学科教授 斉藤言子
 - 場所：神戸女学院講堂
- 新年礼拝
 - 日時：2013年1月11日(金)10:35～11:25
 - 説教：神戸女学院大学チャプレン 中野敬一
 - 場所：神戸女学院ソールチャペル
- 問い合わせ：宗教センター(チャプレン室) TEL0798-51-8502

高校生等参加イベント

- 一般入試説明会
 - 日時：11月23日(金・祝)13:00～17:00
 - 場所：難波御堂筋ホール(大阪市中央区難波4-2-1)
- オープンキャンパス
 - 日時：12月8日(土)13:00～17:00
2013年3月23日(土)11:00～15:00
 - 場所：神戸女学院大学
 - ※12/8は一般入試説明会もあわせて行います。
 - 問い合わせ：入学センター
TEL0798-51-8543 E-Mail: e-exam@mail.kobe-c.ac.jp
- 理学館体験
 - 日時：12月8日(土)時間未定
2013年3月23日(土)時間未定
 - 場所：神戸女学院大学 理学館 S-24
 - 問い合わせ：人間科学部事務室
TEL0798-51-8553 E-mail: taiken@mail.kobe-c.ac.jp

めぐみ会主催行事

めぐみ会公開講座

- 2012アートセミナー
 - キリスト教聖堂・聖なる空間の美を解説する
 - 日時：第1回 11月30日(金)11:00～12:30
モザイク壁画の荘厳と神秘～ラヴェンナ(イタリア)のビザンチン聖堂
 - 第2回 12月14日(金)11:00～12:30
エル・グレコの美学を極めた聖なる空間～アラゴン学院聖堂(マドリッド旧在)
 - 第3回 12月21日(金)11:00～12:30
バロック聖堂に演出される信仰のドラマ～ペルネーニのコロナーロ礼拝堂(ローマ)
 - 講師：大阪大学文学研究科准教授・神戸女学院大学非常勤講師 岡田 裕成 氏
 - 会場：神戸女学院めぐみ会館
 - 受講料：各回1,000円(学生は無料) ※要予約(HPも可)
- 2012キリスト教セミナー
 - 初期の記述預言者——キリスト教倫理の礎
 - 日時：第1回 2013年2月5日(火)11:00～12:30
アモス——最初の記述預言者
 - 第2回 2013年2月19日(火)11:00～12:30
ホセア——母なる神
 - 第3回 2013年3月5日(火)11:00～12:30
イザヤ——派遣された者
 - 講師：神戸女学院チャプレン・同大学学長 飯 謙 氏
 - 会場：神戸女学院めぐみ会館
 - 受講料：各回1,000円(学生は無料) ※要予約(HPも可)
- 申し込み・問い合わせ：公益社団法人神戸女学院教育文化振興めぐみ会
TEL0798-51-3545 URL: http://www.megumikai.or.jp/

「Kobe College International Students House」誕生



神戸女学院正門近くに誕生した「Kobe College International Students House」

神戸女学院正門近くのキャンパス隣接地に、「Kobe College International Students House」(以下、International House)と名付けられた施設が誕生しました。International Houseは、2010年より開始した研修プログラム「地域からESD(持続可能な発展のための教育)を推進する女性環境リーダー」履修のため、アジア各国から本学に留学している大学院生のための寄宿舎として、開設しました。今年9月には、関係者が集まり開設式が行われ、10月から5名の第3期留学生を受け入れています。開設に先立ち、改修工事を行い、室内にはパブリックスペースも設けられており、留学生と本学教職員・在学生との間で、国際交流が期待されています。

※行事について特に記述のないものは、基本的に申し込み不要・無料です。

- 本誌へのご意見、お問い合わせ：神戸女学院大学広報委員会 〒662-8505 兵庫県西宮市岡田山4-1 / E-mail kckoho@mail.kobe-c.ac.jp
- 表紙解説：本学大学院文学研究科英文学専攻「通訳・翻訳コース」開設10周年記念イベントとして、2012年7月に本学院講堂にて開催した『ジョブズの世界を訳す』の基調講演。講演者は公式伝記『スティーブ・ジョブズ』の訳者であり、本学大学院の非常勤講師でもある井口耕二氏。(本編に記事掲載)